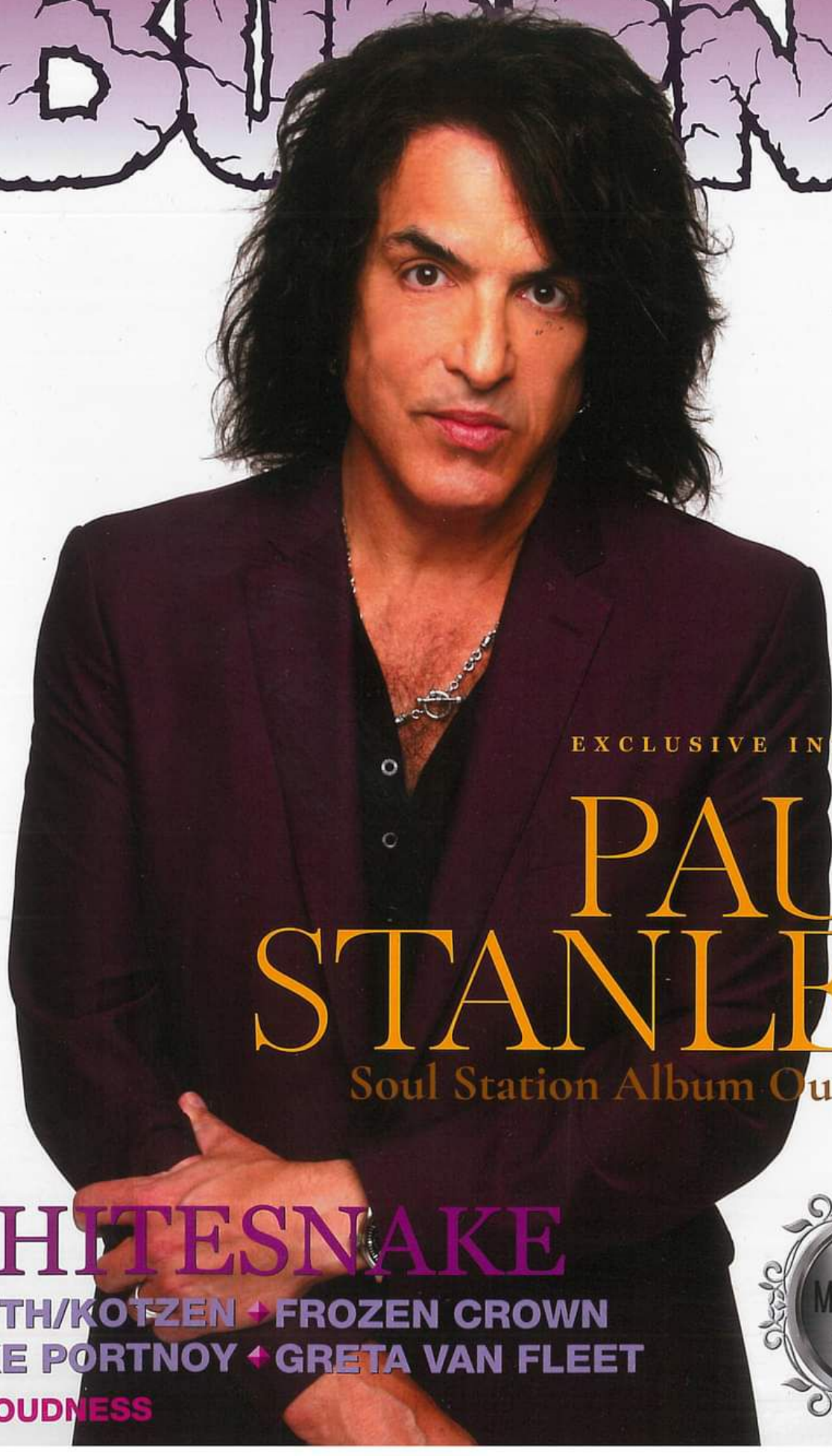
BURRN! 2021年5月号　2021年4月5日発行・発売（毎月5日発行・発売）第38巻・第6号・通巻538号

THE WORLD'S HEAVIEST HEAVY METAL MAGAZINE

# BURRN!



EXCLUSIVE INTERVIEW

## PAUL STANLEY

Soul Station Album Out Now!!

## WHITESNAKE

◆SMITH/KOTZEN ◆FROZEN CROWN
◆MIKE PORTNOY ◆GRETA VAN FLEET

POSTER : LOUDNESS

5
MAY * 2021
Paul Stanley

# The Starchild's Soul Searchin'

EXCLUSIVE COVER STORY

# PAUL STANLEY'S SOUL STATION

pic Oliver Halfin

**ロックン・ロールに選ばれた男、**
**ポール・スタンレーの新たな旅が始まった。**
**2015年に始動させたこの新プロジェクトによる待望のアルバム**
**「NOW AND THEN」において、我らがスターチャイルドは**
**自らの根源にあるものと向き合うのみならず、**
**歴史と現在とを繋ぎながら新たな可能性を見事に開花させている。**
**その素顔と魅力に、今、改めて迫る。**

AN EXCLUSIVE INTERVIEW WITH

# PAUL STANLEY

## これは、しっかりと大地に根を広げた樹木であり、この先も成長していくもの。歴史の素晴らしさだけを讃えるのではなく、それがいかに自分を現在へと至らしめたかを示したかった。

by YOU MASUDA

何か新しいことに挑んでみたいと感じた時、人は「いや、もう遅過ぎるのではないか?」と自分の欲求にストップをかけてしまうことが少なくない。年齢を重ねていくほどにそうした傾向は強くなっていくものだろう。だが、今年の1月20日をもって69歳になったKISSのフロントマン、ポール・スタンレーは、そうした躊躇が無用であることを、身をもって示している。

PAUL STANLEY'S SOUL STATIONは、その名のとおり、彼自身を首謀者とするソウル・ミュージックのプロジェクトであり、その始動は2015年まで遡る。元々はあくまでチャリティ活動の一環として企画されたもので、彼自身は当初の動機について「素晴らしい音楽が、素晴らしい演奏によって披露される場が失われるべきではないという想いからくるもの、つまり、リアルなライヴ・ミュージックの素晴らしさを改めて広めるべき使命感によるものだということを語めていた。それは、楽曲がジャム・セッションではなくデータのやり取りで作られることが主流となり、バンド然としたオーガニックな成り立ちの音楽がメインストリームから姿を消しつつある現状に対する危機感とも無関係ではなかったはずだ。

同時に想像できるのは、ポールの中に、自身のロック・ヴォーカリストとしての側面以外の可能性を世に提示したいという願望がずっと燻っていたのではないか、ということだ。

彼は、1999年にはトロントにて、ミュージカル「オペラ座の怪人」のステージに立つという念願を叶えている。ロンドンでその舞台を観て以来、いつか自分でもファントムを演じてみたいと思うようになったという彼は、わざわざオーディションまで受けてその役を勝ち取っているのだ。その際のチャレンジと同様に、ソウル・ミュージックと本格的に向き合う機会を持つことは、彼にとっていつか叶えたいことのひとつだったのだろう。なにしろそれは、ハード&ヘヴィなロック・ミュージックに夢中になる以前に彼を音楽の世界の深みへと誘い込んだものでもあるのだから。彼は、次のように語っている。「僕はフィリー・ソウルやモータウンといった音楽を聴きながら育ったんだ。LED ZEPPELINやTHE WHOをはじめとする偉大なイギリスのバンドをいろいろと聴くようになったのは、それよりもずっと後のことでね。オーティス・レディングやソロモン・バークは、幸運なことに生で観ることもできたんだよ。そういった音楽や曲の物語性は、当時の辛い日常の中で、僕に力と希望を与えてくれた。あの時代の偉大な名曲は、多くの人々にとって魔法の薬となる。それで僕は、自分達にも使えそうな魔法を探しに、あの時代に立ち返ったんだ」

そもそもはライヴ活動のみを行なっていた彼らだが、アルバム制作というテーマが次なる目標地点に設定されるまでにさほど時間はかからなかった。2018年1月にはPAUL STANLEY'S SOUL STATION名義での初の来日公演が実現しているが、その際に行なったインタビュー(本誌同年3月号掲載)でポールはこう語っていた。

「僕らの計画としては、いくつかのクラシック・チューンをレコーディングするばかりではなく、新しいオリジナル曲も録ろうじゃないか、と。幸いなことに、僕の楽団の中には優れたソングライター達もいるからね。そうした人達と、ルーツを大事にしながらも新鮮な楽曲を作りたいと思っているんだ」

実際、その来日公演ではカヴァー曲のみが披露されていたが、このプロジェクトの目的は当時すでに、古き良き往年のソウル・ミュージックに対する単なるオマージュやトリビュートではなくなっていたのだ。

そして、その来日公演から3年以上を経て届けられたPAUL STANLEY'S SOUL STATIONのデビュー・アルバム『NOW AND THEN』には、歴史ある馴染み深い名曲ばかりではなく、5曲のニュー・ソングもフィーチュアされている。しかも、3年前のインタビューではダイアン・ウォーレンやマックス・マーティンといった、彼が懇意にしているソングライター達との共作の可能性がほのめかされていたが、それら5曲はすべてポール自身により書き下ろされたものだ。その5つの最新曲が過去と現在を繋ぎ、ポール・スタンレーという歌い手の知られざる一面を示し、さらにその先に広がる未来にも受け継がれていくべき普遍的なものの価値というのを伝えているように僕は思う。

勿論、音楽には嗜好品としての部分もあるわけで、ソウル・ミュージックに対する興味がないという読者も少なからず居ることだろう。ただ、そうした領域への案内人が彼であることの意味は小さくないはずだし、ポール・スタンレーという人物の求道精神や人生観のあり方といったものには、音楽的な種類とは関係なく人を惹きつけずにおかないものがあるはずだ。早速、彼の"今"のリアルな声をお届けしよう。なお、この取材はアルバム発売を1ヶ月後に控えた2月なかば、時節柄、リモート形式で実施されたものである。

**――このPAUL STANLEY'S SOUL STATIONは2015年には始動していたわけですが、このプロジェクトでのアルバム発表は世界中のファンが楽しみにしていたことであると同時に、あなた自身にとっての念願でもあったはずです。まずはアルバムが完成に至り、あとは発売を待つばかりとなった現時点での心境から聞かせてください。**

**ポール・スタンレー(以下P)**:とても嬉しい。言ってみれば、子供ができたことがわかってから、その誕生をずっと待ち続けてきた親のような気分だよ。しかも生まれてきた子は本当にビューティフルでね……。ここで僕自身はようやくホッとひと息つけるというか。(笑) 実際、嬉しいことに、僕自身とSOUL STATIONのメンバー達ばかりじゃなく、このアルバムの音源を聴いてくれた人達すべてから気に入ってもらえている。音段どんな音楽を聴いているのかなんて関係ないんだ。結局のところ音楽には良い音楽と悪い音楽しかなくて、これは間違いなくグッド・ミュージックだといえるからね。

**――まさに「NOW AND THEN」というタイトル自体が、このアルバムが何たるかを物語っていますよね。ここにはあなたが幼少期から親しんでこられた歴史的な名曲達の数々に溢れたカヴァーばかりではなく、このプロジェクトのために書き下ろされた真新しい楽曲も5曲収められています。単なるカヴァー集として完結することなく、こうした音楽を現代に復活させ、さらには未来へと導いていこうとするかのような気概を感じさせられます。実際、新たにオリジナル曲を作ろうとした動機はどこにあったのでしょうか?**

**P**:レコーディングを進めるうちに、これらの名曲達に対するオマージュを別にしてリスペクトの念を示すことも大事だけども、それがいかようにして時代を経ながら今現在へと至り、さらに未来へと紡いでいくかを示すことも同じくらい重要だと感じるようになったんだ。新曲と名曲、どちらがより優れているかという問題ではなく、新しいとか古いという概念を超えた"さらなる楽曲"というか、その水に当たり前のように実をつける果実以上のものを求めたかった。つまり、過去の歴史の素晴らしさだけを讃えるのではなく、それがいかに僕自身やこのバンドを今現在へと至らしめたか、というのを示したかったんだ。

**――実際問題、長年の思い入れが染み付いた往年の名曲達が並ぶ狭間に新しいオリジナル曲を交えるというのは、かなり度胸の要ることでもあるでしょうし、楽曲によほどの自信がないとできないことだとも思います。そうした部分での迷いや苦心といったものはなかったのでしょうか?**

**P**:いや、すべての流れは自然だったから、チャレンジを恐れる気持はなかったよ。僕は、自分以外の誰かになろうとしたわけでもなければ、名曲を書いたソングライター達はどうやってあれを書いたのか、

pic.Oliver Halfin

と分析しようとしていたわけでもなかったからね。むしろ単純にスタジオであれいった音楽に囲まれ、それにどっぷり浸かっていたので、そういう楽曲を作ること以外考えられなかった、というのが本当のところなんだ。(笑)

ただし、アルバムの中ではそうした名曲と自分が新たに作った楽曲とが隣り合わせになるわけだから、そうして両を並べるに足る価値のある曲にしなければならない、という想いはあった。だから……いっそう注意深く取り組む、というわけではないけども、とにかく敬意をもって取り掛かったよ。今作のために最初に書き下ろした"Save Me (From You)"がすごく良い曲になったことで、さらに書こうという気になり、そのまま曲作りとレコーディングを続けていった。あくまでそういう自然な流れだったんだ。モータウンやフィリー・ソウルの新しいヴァージョンを作り出してやろうなんていうおこがましい気持は皆無だった。ただただ、今現在の楽曲である、ということなんだ。そしてカヴァーであれ新曲であれ、その曲自体の真価というものを大切にしたかった。

**――歌詞についてはいかがですか？　新曲5曲はいずれも基本的にはラヴ・ソングのように思えますが、今現在の曲として提示するうえで意識した、往年の曲との違いというのはありましたか？**

P：実際、いずれの曲でも愛、もしくは失われた愛といったものについて歌っている。世界を取り巻く問題とかについては歌っていない。ある意味、恋愛というのは時代を問わず世界的問題ではあるけども（笑）、いわゆる社会的、政治的な内容の歌詞を伴った曲を挟み込むべき場所は、このアルバムにはなかった。

今回、このアルバムに入れたかったのは、聴いた時に"懐かり"を感じさせる曲ということになるかな。懐かる相手はパートナーなのかもしれないし、人生におけるある時代、もしくは状況なのかもしれない。"名曲と呼ばれる曲がどれも素晴らしいのは、心にグッとくるというか、感情に訴える何かがそこにあるからだと思う。新曲を作るにあたっても、それを目指したということだよ。たとえば"I Oh (「はアップテンポの曲だけども、そこでは「自分は孤独だった／キミがいないと道に迷ってしまう」と歌っている。だけど決して、回答を吐きながら泣いているわけじゃない。「かつて知らなかったことが今はわかる」ということ自体に感謝しているんだよ。そして、「僕にはそれを受け容れる準備ができたよ」と歌っているわけなんだ。

"Lorelei"もまた愛の歌だ。別れるべきか関係を続けるべきか……。でも、いざ別れると決めた場合でも実は一緒に来て欲しいと願っている、というか。そうした誰もが経験したことのあるような状況の歌なんだ。人間ってそれぞれに違うけども、実は誰もが似たようなことを経験しているものだからね。いざ別れるとなっても、実は一緒に来て欲しいと願ってるというか――。誰もが経験したことがあるような状況さ。

**――だからこそそうした物語を共有できるわけですよね。しかもこうして考えてみると、あなた自身の曲作りはKISSにおける場合と基本的にはさほど変わっていないように思います。実はラヴ・ソングであるという点のみならず、コーラスを多用していて楽曲としてコンパクトであることも含めて。そうした部分を指してBEATLES的と解釈されることも多かったわけですが、それは前に、確かに往年のモータウンやソウル・ミュージック的でもあります。**

P：そのとおりだと思う。KISSがどんな音楽に影響を受けてきたか、ということ。そこに気付いていない人が多いことに驚かされることも結構あるんだ。たとえば"Shout It Out Loud"がどういう曲かを思い出してみて欲しい。あの曲は「Well,the night's begun and you want some fun.Do you think you're gonna find it ?」という歌い出しから始まるけども、そこにすぐさま「Think you're gonna find it」と追い駆けるように歌うコーラス・パートが続いていくよね？　あれはまさしくFOUR TOPSの"I Can't Help Myself (Sugar Pie Honey Bunch)"のスタイルなんだ、あのリード・ヴォーカルとバック・ヴォーカルのコール＆レスポンスがね。

そうした意外なところにルーツがあるからこそ新鮮に受け止めてもらえるところがあるんだろうし、実際そういう曲がKISSにはたくさんある。しかもKISSとしての領域に限らず、僕自身はどんどん自分のルーツに戻って行っている。なにしろKISSという場では「そういう要素を使って書くと新鮮じゃないか？」と考えて作っていたのに対し、今ではこうしてSOUL STATION用の曲を書いてみようと思い立ち、さらに一歩踏み込んだわけだからね。

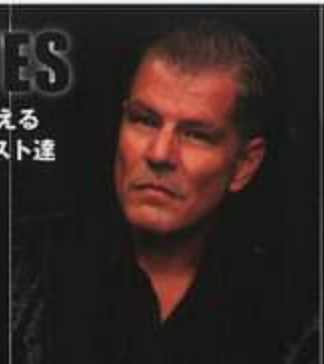
**――ええ。しかしKISSのステージであなたしか知らない人達がこのプロジェクトであなたの歌声を耳にしたなら、驚きを隠せないはずですよね。KISSでのあなたは常にフル・ヴォリューム、時にはそれ以上の声量で歌うことを求められているわけですが、SOUL STATIONでは違う、この味の歌唱こそが、よりリアルなあなたの歌声ということになるのでしょうか？**

Pはい、すべてがリアルな僕だよ。いずれも"歌う"

# SOULMATES

## ポール・スタンレーを支えるソウルフルなスペシャリスト達

pix:Brian Lowe



アレックス・アレッサンドリーニ●ミュージカル・ディレクターとしてこのプロジェクトの指揮をとるキーボード奏者。ベイビーフェイスやホイットニー・ヒューストン、クリスティーナ・アギレラ、PINKからマイク・バットンに至るまでの数多くの多種多様なアーティスト達との共演歴、もしくはディレクションやレコーディング歴を持つ重鎮。

エリック・シンガー●実わすと知れたハード・ロック界の名ドラマーは、実はソウル・ミュージックにも精通。そのキャリアにおいてKISSでの活動歴は最も長いものになっているが、かつてはポールのソロ・ツアーに参加したことも。ただ、その際ポールは、彼が強力なドラマーであるのみならず素晴らしい歌声の持ち主であることに気付かずにいたとの逸話もある。

クリスタル・スター●スターチャイルドの録音制作を務めるのに相応しい名を持つ彼女は、ジェシカ・シンプソン、スティーヴィー・ワンダー、カニエ・ウェスト、アリアナ・グランデらのバッキング・ヴォーカルを務めてきた歌い手である。TV番組「アメリカン・アイドル」や、ブロードウェイ・ミュージカル「ベイビー・イッツ・ユー」にも出演歴がある。

ラファエル"ネッファ"モレイラ●ギタリストでありバッキング・ヴォーカルも務める彼の共演歴もまた、PINK、クリスティーナ・アギレラ、スティーヴン・タイラーからBACKSTREET BOYS、シェリル・クロウ、スティーヴィー・ワンダーに至るまで、実に幅広い。加えて「ザ・ヴォイス」「アメリカン・アイドル」といった数々のTV番組にも出演してきた。

ギャヴィン・ローン●ポールの楽唱をバックアップする、頼もしい助っ人のひとり。これまでビトブル、ニック・ジョナス、スティーヴィー・ワンダー、トレイ・ソングス、ジャスティン・ティンバーレイク、アッシャー、ベイビーフェイスらのライヴでバッキング・ヴォーカルを務めてきた実績があり、現在はTHE GAP BANDのリード・ヴォーカリストでもある。

ショーン・ハーレー●ロサンゼルスを活動拠点とする、凄腕と評判の高いベーシスト。かつてはオルタナティヴ・ロック・バンド、VERTICAL HORIZONの一員として活動していた。これまでジョン・メイヤーをはじめ、ロビン・シック、アニー・レノックス、リンゴ・スターら、数多くのアーティストとレコーディング及びツアーを重ねてきた実力者だ。

ジョン・バーベンブルック●リード・トランペットとして彼がこれまで共演してきたアーティストはナタリー・コール、アレサ・フランクリン、ポール・アンカやフランキー・アヴァロンなど数知れない。ハリー・ジェイムスのオーケストラやバディ・リッチのビッグ・バンドでも演奏してきた彼は、ライヴや制作現場のみならず、TVや映画の世界でも活躍している。

イーライ・ライス●アレックスと共にキーボードを担当する彼は、人気TV番組「エレンの部屋」や「ジミー・キンメル・ライブ！」などに出演。さらに、アダム・ランバート、メイシー・グレイ、マイク・ポスナーといったアーティスト達の作品で楽曲提供やプロデューサーを務めてきた。当代の大物プロデューサー達からの信頼も厚いセッション・プレイヤーだ。

レイ・イスラス●クリスティーナ・アギレラ、ボニー・レイット、ジェニファー・ロペス、BACKSTREET BOYSらを含む、数多くのビッグ・ネーム達とのツアー経験を持つ、凄腕バーカッショニスト。「サタデー・ナイト・ライヴ」をはじめとする人気TV番組への出演歴も豊富で、現在はCHICAGOのツアー・メンバーとしても活動中だ。

ローラン・ペアート●ロサンゼルス音楽シーンにおいては、すでにウェテランの域に達しているシンガーのひとり。「ビデオ・ミュージック・アワード」からアカデミー賞授賞式に至るまでのステージで、さまざまなアーティストとステージを共にしてきた。共演歴にはトリー・ケリー、ジョン・レジェンドといった名前を見付けることができる。

pic:Oliver Halfin

**このパンデミックの恐ろしさについては、言葉にならないよ。**
**ただ、そうした危機的状況から何かひとつでも良いことが生まれ得るとすれば、**
**それは、いかに人間同士がお互いを必要としているかを知ることじゃないだろうか。**

ということの一部なのであって、一方のほうがもう一方よりも正しいとか、どちらか一方だけが本来の自分らしいとか、そういうことにはならないんだ。歌というのは、そういうものじゃないのさ。異なるスタイルや解釈というのが同立可能なものなんだ。しかも僕自身、自分の声が、多くの人達から思われている以上に"広い"ものだってことを自負しているからね。限定的な解釈になるのは、特定のスタイルでの歌唱しか聴いたことがない人達からすれば仕方ないことでもあるだろうけども。

1年ほど前、近所に住んでいるロッド・スチュワートとお茶を楽しみながら、SOUL STATIONの話をしたことがあった。「R&Bのバンドをやっているのか？　シンガーは誰？」と言われたんで「僕だよ」と答えたら、「ああいう曲を歌えるのか？」と意外そうな反応をしていたよ。(笑)　べつに彼には悪気があったわけじゃなく、素直にそう思ったんだろうね。で、曲を聴かせてみたら驚気にとられた様子だった。なにしろそれは、まさしくロッド自身にとってのルーツ・ミュージックといえるものだからね。ポール・ロジャースについてもそうだ。僕の場合、KISSでのヴォーカル・パフォーマンスにしか触れたことのない人が多いから、こうした一面があることは知られていないけど、だからといってそういう曲がやれないわけじゃないんだ。

**――KISSでの声を張り上げて歌うスタイルについてもそうですけど、我々の頭の中では、あなたは常に"ギターを弾きながら歌う人"でもあるわけです。通常楽器をプレイしながら歌っている人達がマイクロフォンの前で歌に専念するようになった際、「まるで裸でステージに立っているような感覚で、どうも落ち着かない」みたいな発言をするケースも少なくありません。あなたの場合はいかがですか？**

P：マイクの前で歌うことには一度も抵抗を感じたことがないよ。勿論、ギターを抱えながら歌うことは大好きなんだが、このバンドではギターを弾きたくなかった。ここにはラファエル("ホップ"モレイラ)という素晴らしいギタリストも居ることだしね。それに僕自身、何よりシンガーで居たかったんだ。だからしっくりきているよ。僕の根源は元々、リード・シンガーであるという部分にあるんだ。スティーヴ・マリオットはギターも弾いたけど、彼を除けば、僕はそもそもロッド・スチュワート、ロバート・プラント、ロジャー・ダルトリー、そしてR&Bの偉大なシンガー達から影響を受けてきたんだ。だからギターを抱えているか否かを問わず、いつも気持良く歌えている。

**――あなたはここ数年の間に2冊の自叙伝(「ポール・スタンレー自伝　モンスター―仮面の自白―」と「ポール・スタンレー新自伝　バックステージ・パス」、いずれも日本語版はシンコーミュージック刊)を発表してきました。そしてこのプロジェクトでは当然ながら素顔で活動し、こうして自らの音楽ルーツに直結した作品を発表している。KISSでのあなたには特定のペルソナを演じている部分があるわけですが、今現在のあなたは、もっとリアルな自分、人々がこれまで知らずにいたあなたの実像といったものを伝えることに、より積極的に取り組んでいるように見受けられるのですが。**

P：それを人々とシェアする必要性を感じている、というところがあるのは間違いないね。秘密は少ないほうが、より自由になれるものさ、人に対してオープンに自分を見せることで、僕という人間がみんなとさほど違いはしないんだということがわかってもらえる。誰がどんな試練を乗り越えてきたか、その人にとっての幸せとは何か――そういう話を聞くと「なんだ、そんなふうに感じていたのは自分ひとりだと思っていたけど、まるで一緒じゃないか」と思わされたりすることがあるものだよね。相手に対して拳を握ったままの状態で向き合っていても、そこからは何も生まれてきはしない。だけど手を開いて、その手を伸ばせば、何かを与えることも受け取ることもできるじゃないか。そう、だから確かに今現在、僕の人生は、あらゆる面においてオープンでありたい、誰かと何かを分かち合いたい、人を助けたい――そんな時期にあるのかもしれないね。何故かといえば、それは僕の人生を豊かにしてくれることだからだ。

**――人を助けたい、という言葉で思い出しましたが、そもそもSOUL STATIONはチャリティを目的に始動したプロジェクトでもありましたよね。世界は今もなおパンデミックに悩まされ、救済を求めています。SOUL STATIONの音楽は、疲れきった人達を癒したり救ったりする力のあるものだと思うのですが、ロックダウン中、ご自身のミュージシャンとしての役割について改めて考えるようなことはありましたか？**

P：このパンデミックの恐ろしさについては、言葉にならないよ。失われていい命なんてものは、ひとつもないからね。なのに現実には、そのために何百万という人命が失われてしまった。ただ、それでもそうした危機的状況から何かひとつでも良いことが生まれ得るとすれば、それは、いかに人間同士がお互いを必要としているかを知ることなんじゃないだろうか、人間同士が支え合うこと、人間には違いよりも共通点のほうが多いんだということに気付くこと――。

バンデミックの最中、音楽監督のアレックス(アレッサンドリーニ)、ギャヴィン(ローン)、ローラン(ベアート)、クリスタル(スター)と一緒に"Ooo Baby Baby"(アルバム収録曲のひとつであるSMOKEY ROBINSON & THE MIRACLESのカヴァー)をピアノ伴奏のみで歌い、YouTubeに上げてみたんだ。そしてファンに一緒に歌ってくれるように声をかけた。気持が良くなるはずだから一緒に歌ってごらん、とね。結局、重要なのは、誰かの人生を変えられるかどうかではなく、誰かを助けるためにオープンな気持でいられるかどうか、ということなんだと僕は思う。

**――なるほど。ところで今作からは"O-O-H Child"(THE FIVE STAIRSTEPSのカヴァー)がアルバム発売に先駆けて公開されましたが、その理由もこの曲の歌詞のメッセージにあるのでしょうか？**

P：そうだね。"O-O-H Child"は希望の歌だ。この先、今よりも良い日が訪れる、そこにみんなで行けると信じる気持が歌われているんだ。「きっと楽になる／美しい太陽の光の中を歩いて行ける／そこでは世界は今よりも明るく／肩の荷は降りて軽くなる」――今、人々が聴きたがっているのはそういうメッセージじゃないだろうか。この曲のオリジナルが出た頃に聴いた時、僕は「耐えるんだ、頑張れ！」と呼び掛けられているかのようなメッセージ性を感じたものだよ。だからこれは今現在という時期に、まさに太陽のように、長いトンネルの先にある光のように、これまでのどんな時代よりも意味のあるメッセージになり得ると思えたんだ。「きっと今より良くなる／今より明るい日が待っている」――そう信じることに勝るパワーはないからね。

**――今回カヴァーした楽曲の中で、子供の頃には普通の流行歌として聴いていたけども、今の年齢になって聴くと当時は気付きもしなかった意味があった、というような発見を伴うものもあったのではないですか？**

P：スモーキー・ロビンソンの"Tracks Of My Tears"にはそういうところがあったね。初めて聴いた当時の僕はまだ学生で、映画を観るみたいな感覚で聴いていた。自分よりも年上の誰かが経験しているのは、自分がまだ知らない世界。でも、すごく魅力的な世界に思えていた。ところが気付くと、それは違う意味を持つようになっていた。つまり"誰か"ともう一緒にいられない状況に自分が置かれていて、その寂しさを回すために僕は作り笑いを浮かべているんだ、そして言う、「見た目には大丈夫のように見えるかもしれないが／近付いて見てごらん／僕は大丈夫じゃない」とね。これは、そういう歌なんだ。

**――さて、そろそろ時間のようです。このインタビュー記事をまず目にするのはKISSファン、ハード・ロックやメタルを愛好する読者ということになるはずです。彼らに向けて、SOUL STATIONの代表者としてのメッセージをいただきたいのですが。**

P：自分の周りのことに、耳と目とマインドを開くことができるかどうかは、自分自身にかかっているんだ。たとえそれが、一見すると自分とは相容れそうにないもの、ある種の違和感をおぼえるものだとしてもね。そしてそれを受け入れていくことで、その人間にとっての世界が広がっていくことになる。もしも毎日同じものしか食べないで生きていたら、退屈な人生になってしまうよね？　それと同じことで、同じ音楽しか聴かずにいたら、それ以外のものを経験する可能性そのものが失われてしまうことになる。

つまり、僕が言いたいのは「目隠しは取れ！」ということさ。音楽に限らず、生きていくうえで、という意味でね。最初からハートとマインドを閉ざしていたら、好きになるはずのものも好きになれないまま終わってしまうし、そこで損をするのは君自身ということになる。勿論わかるよ、僕にだって、これまで試してみたけど好きになれなかったものというのはあるからね。でも、自分でもビックリするような結果が待っているかもしれない、まずは心を開いて、試してみること。それで駄目だったら、また先に進めばいいんだ。■■■

# [検証] ポール・スタンレーの"本当の歌声"の秘密

by YOU MASUDA

どれほど取材の機会を重ねようと、アーティストの本当の素顔まで知ることはできないものだ。ただ、バンドの終焉点を見据えている近年のポール・スタンレーとジーン・シモンズが、かつて以上に本音を吐き出すようになっていることは間違いない。そもそもKISSには「嘘をつくわけではなく、必要以上の事実を明かさない」傾向があったが、もはや彼らには隠さなければならないこと、公表すると不都合なことが、ほぼなくなりつつあるのだろう。今回の取材中にポールの口から聞こえてきた「秘密は少ないほうが、より自由になれる」という言葉は、まさにそれを象徴している。

インタビューの中でも触れたが、近年になりポールは『ポール・スタンレー自伝　モンスター〜仮面の告白〜』(2014年)、『ポール・スタンレー 新自伝 バックステージ・パス』(2020年)という2冊の自伝を発表していて、その中でも彼自身の生い立ちや音楽遍歴などが語られている。この場ではそうした発言も引用しながら、改めて彼という歌い手の根底にあるものを探ってみたい。

彼は2冊目の自伝の中で、SOUL STATIONという場を設けた動機が「自分の好きな音楽を聴きたい、今までやってきたのとはまったく違うバンドをやってみたい」という気持からくるものだったと説明している。そこで彼が思い描いたのは、複数のホーン奏者、複数のシンガーなどを擁し、可能な限り多様な民族性や背景を持った構成による大所帯バンドだった。そして、その多様性を、全員に共通する音楽的情熱により連結させながら音楽の素晴らしさを昇華することに、彼は価値を見出していた。

「これは、自分の能力を肯定する素晴らしいやり方だと思う。誰もがSOUL STATIONのようなものを持つべきだとまでは言わないが、誰にでも願望はあるはずだし、それを逃げぬまま後悔しながら生きるのか実行するのか、という問題なんだ」

これは想像の域を出ないことではあるが、近年の彼が自伝を書いたり、絵画に挑んでみたり、自宅で料理を楽しむ家庭人としての姿を表に見せたりするようになっているのは、KISSのフロントマンとしての活動だけで人生を終えたくないという気持の表われなのではないかと察せられる。そこで、KISSの枠を超えたところで改めて追求すべきものとして、幼少期から親しんできた懐いの音楽に目が向いたことは、さほど不自然ではないだろう。裸かに彼にはソロ・アーティストとしてのキャリアもあり、そうした音楽にテーマを絞ったソロ作品に取り組むという選択肢もあったはずだが、彼にとってはそれ以上にこうした"場"を設けることが重要だったのではないだろうか。

ちなみに彼が絵画に取り組むようになったのは、過去に「CREATURES OF THE NIGHT」(1982年)や「LICK IT UP」(1983年)といったKISS作品で共同プロデューサーとして起用されていたマイケル・ジェイムズ・ジャクソンが、私生活の面で疲弊した状況にあったポールがそもそもアートスクール出身であることを知り、「絵を描くことで自分の中にあるものを吐き出して、内面を探ってみてはどうか」と勧めたことが切っ掛けだったという。いわばそれが、ある種のセラピーとしての役割を果たすことになったというわけだ。

ただ、ポールの人生において最初にそうした役割を果たしたのは、やはり音楽だった。彼は1952年1月20日、ニューヨークに生まれている。そして、自伝などが世に出るまではあまり広く公表されていなかったが、彼は生まれつき右耳が不自由だった。右の外耳が形成不全の小耳症で、右側の聴力がなく、幼少期には周囲の子供達からの無邪気ないじめにより塞ぎ込みがちだったという。そして当時の彼は、映画やTVで見たローン・レンジャーや怪傑ゾロに憧れ、仮面をつけた正義の味方になることを夢見ていた。

同じ頃、彼は音楽の中に避難場所を見出すことになった。その切っ掛けになったのは、5歳当時にベートーヴェンの"ピアノ協奏曲第5番・皇帝"を聴いたこと。ほどなく、母親が聴いていたラジオから流れてくるロックン・ロールに惹かれるようになり、エディ・コクランやリトル・リチャードの音楽と出合っている。祖母にねだって初めて手に入れたレコードは、THE EVERLY BROTHERSのSP盤シングルだった。それ以上に彼の音楽人生の大きな転機となったのは、1964年2月、12歳になった数週間後に、TVの「エド・サリヴァン・ショウ」でBEATLESの動く姿を目にしたことだった。彼は自著の中で「僕がこの状況から出ていくための切符はこれだ、と直感した」と当時の衝撃を振り返っている。その後、THE DAVE CLARK FIVE、KINKS、ROLLING STONES、THE SEARCHERSなどにも興味を持つよ

## 「PAUL STANLEY」 1978年

①Tonight You Belong To Me ②Move On ③Ain't Quite Right ④Wouldn't You Like To Know Me ⑤Take Me Away (Together As One) ⑥It's Alright ⑦Hold Me, Touch Me (Think Of Me When We're Apart) ⑧Love In Chains ⑨Goodbye

※4人同時のソロ作発表は、KISS内部に不協和音を発生させていたエース・フレーリーとピーター・クリスの型破り手段でもあったが、各々の個性が改めて強調される結果に。他3人の作品がカヴァー曲を含んでいるのに対しポールの作品は全曲オリジナルで、KISS以上にメロウでロマンティックな感触のラヴ・ソングの良曲が目立つが、実際それらは当時、意中の女性に向けて書かれたもの。そうした恋愛体質もまた彼らしさの一部といえる。

## 「LIVE TO WIN」 2006年

①Live To Win ②Lift ③Wake Up Screaming ④Everytime I See You Around ⑤Bulletproof ⑥All About You ⑦Second To None ⑧It's Not Me ⑨Loving You Without You Now ⑩Where Angels Dare

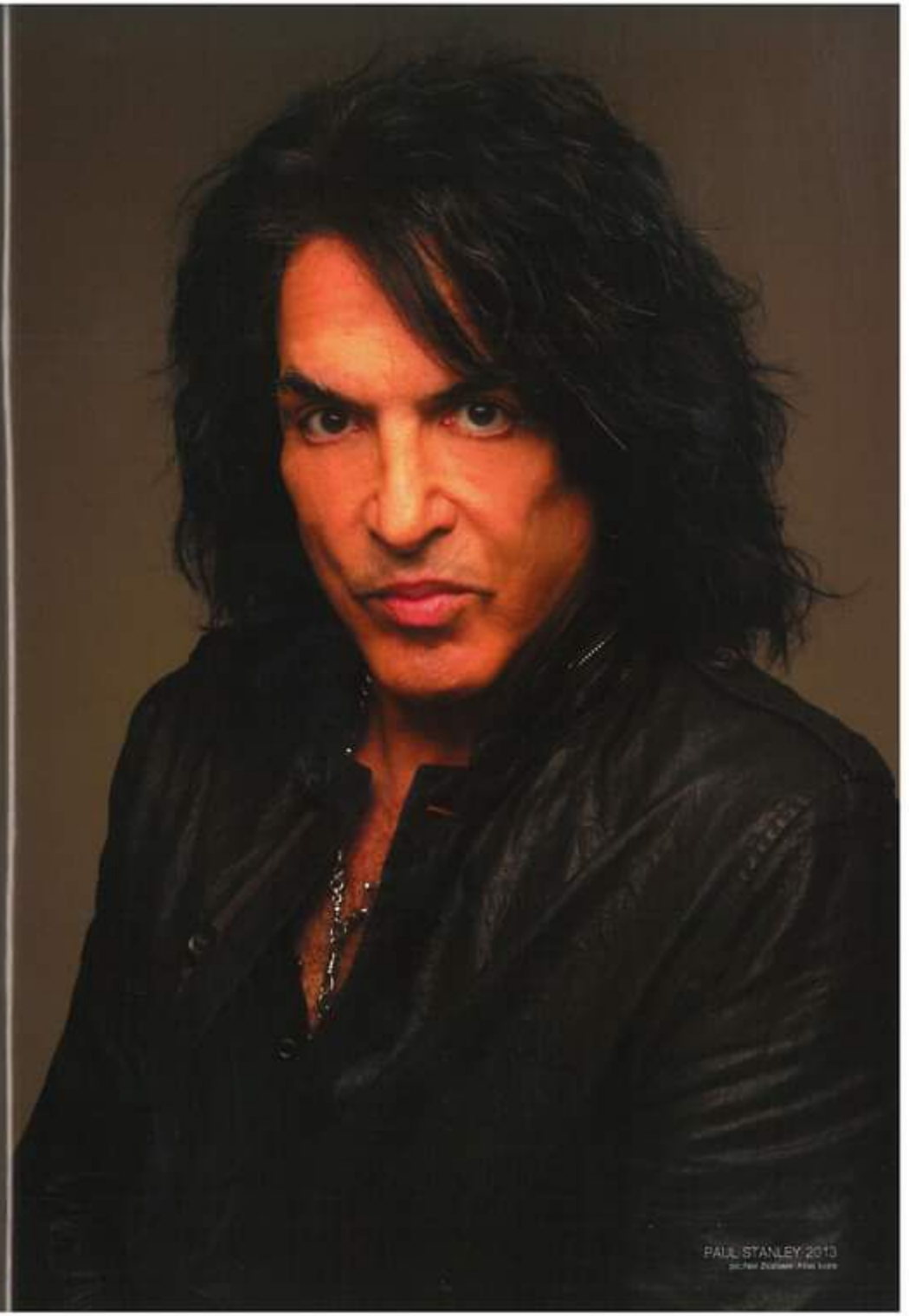
※1978年のセルフ・タイトル作にはいわば「KISSの一員として作られたソロ作」という性質もあっただけに、彼の純然たるソロ作は本作のみとも解釈可能だろう。デズモンド・チャイルドやホーリー・ナイト、アンドレアス・カールソンらを共作者に迎えながら制作されたこの作品で彼が歌いたのは、人間関係に重きを置いた表現とタイムレスな音楽性。2004年に登場したジーンの「ASSHOLE」とは好対照をなしていた。

## 「NOW AND THEN」 PAUL STANLEY'S SOUL STATION 2021年　ユニバーサル　UICY-15875

①Could It Be I'm Falling In Love ②I Do ③I, Oh ④Ooo Baby Baby ⑤O-O-H Child ⑥Save Me (From You) ⑦Just My Imagination (Running Away With Me) ⑧Whenever You're Ready (I'm Here) ⑨The Tracks Of My Tears ⑩Let's Stay Together ⑪La-La-Means I Love You ⑫Lorelei ⑬You Are Everything ⑭Baby I Need Your Loving

※ポールが新たに獲得したもうひとつのホームから生まれた記念すべき初作品。音楽的にはあくまで穏やかだが、その挑戦意欲には凄まじさすら感じられる。ソウル・ミュージックに精通していないリスナーにも馴染みがあるはずの歴史的名曲と、ニュー・ウィンテージともいうべき新曲達が見事に融合している。





PAUL STANLEY 2013

うになった彼は、翌年1月の13歳の誕生日には当然エレクトリック・ギターをねだったが、両親から買い与えられたのが中古のアコースティックだったため落胆。ただ、ほどなくボーイスカウト仲間がエレクトリック・ギターを入手し、彼からシンガーとしてバンドに誘われることになる。そこでは主にROLLING STONESやKINKS、YARDBIRDSの楽曲を演奏していたという。

音楽にのめり込むようになると、中学生のポールは学校をさぼりがちになり、街を徘徊しているうちにクイーンズ地区のジャマイカに大きなレコード店を見つけ、実際に買う金はないながらもそこに通ってはレコードを聞めて楽しむようになる。ちょうど黒人の居住者が多い界隈だったこともあり、店にはジェイムズ・ブラウンやジョー・テックス、オーティス・レディングといったアーティスト達の盤が並び、そこで彼はソウル・ミュージックについて知るようになったのだった。

そうした日々を過ごしながら1年がかりで金を貯めた彼は、その翌年には初めてのエレクトリック・ギターを購入。同じ頃、彼はキャロル・キング&ジェリー・ゴーフィンといったヒットメイカー達による曲を聴きながら、楽曲の構造といったものを学び始めてもいた。英国から伝えられてくるロック・ミュージックの刺激、地元に根付くソウルの魅力、そしてコンパクトかつ機能的に編まれたヒット・ソングの魔法。10代半ばの時点で、彼の中にそうした情報が一気に流れ込んできたというわけだ。しかも彼は、フォークも聴けばブルースにも触れ、さまざまなライヴにも足を運んでいた。少年期はTHE BYRDSの曲をどれでも演奏できるほどだったというし、一方ではTHE TEMPTATIONSやジャッキー・ウィルソンを観に出掛けてもいた。そうした多様な音楽背景について彼は「KISSの音楽とは無関係だと思われるかもしれない。でも、僕の音楽の中には彼らがひとり残らず存在している」と語っている。

KISSの音楽スタイルについては、たとえば昔から"ヘヴィ・メタル版BEATLES"などと形容されることも多く、その言葉があまりに言い得て妙であるがために、逆にそれ以上あまり分析されずにきたようなところもある。ただ、当然ながら彼らはBEATLESのルーツにあたるものも吸収してきたわけで、モータウンやヴィンテージ・ソウルといったものからの影響が根底にあることも間違いない。「LOVE GUN」(1977年)に収録されている"Then She Kissed Me"が、黒人女性ヴォーカル・グループのTHE CRYSTALSが1963年にヒットさせたフィル・スペクター作による楽曲(原曲のタイトルは歌詞の主人公が女性であるため"Then He Kissed Me")のカヴァーであることはよく知られているはずだが、この曲が選ばれたのは単純に"kiss"というキーワードが含まれているからだけではなかったはずだ。

また、同時代的な楽曲のカヴァーとしては、2枚組ライヴ・アルバム「ALIVE II」の最終面に収録されているスタジオ録音曲のひとつ、"Anyway You Want It"がある。こちらは1960年代のブリティッシュ・インヴェイジョンを象徴するバンドのひとつ、THE DAVE CLARK FIVEの1964年のヒット曲で、ポールとジーン双方にとってのお気に入りの楽曲なのだという。

また、ソウル・ミュージックというと条件反射的にディスコを連想する読者もいるかもしれないが、KISSが70年代のディスコ・ミュージックと無関係なわけではなかったことは言うまでもない。「DYNASTY」(1979年)から生まれたヒット・シングル、"I Was Made For Lovin' You"は、当時有名だったニューヨークのディスコ「スタジオ54」での宿を楽しんだポールが、その時の余韻を形にするようにして形にしたものだ。彼はその夜、BPMが126のビートに乗った曲ばかりがひと晩じゅう流れていることに気付いて「これなら自分にもできる」と思い立ち、自宅にあるドラム・マシーンを同じBPMに設定して書いのだという。

SOUL STATIONでのポールの歌唱は、その"I Was Made For Lovin' You"のサビに至るまでの熱量を抑えた歌い方にも通じるものだ。KISSでの平均的な歌唱に比べればだいぶソフトで、楽曲によってはファルセットが多用されている。ただ、ふと考えてみると、むしろこれがポール本来の歌い方に近いのではなかと思えなくもない。ことに80年代の彼の歌唱は、作品を重ねるごとに声域が高いほうへと延びていく傾向にあり、ヒステリックなほどの高音がそのトレードマークになっていたようなところがあった。それはKISSの音楽自体が、初期のシンプルなロックン・ロールから、メタリックで攻撃的な方向へと転じつつあったからでもある。それは音楽的方向転換というよりは、一世代下の80年代的メタル・バンド達、いわば自分達の直接的影響下にあるバンド達と同じフィールドで戦っていくうえでの、必要に迫られた結果としてのアプローチの形だったように思う。

興味深いのは、ポール自身がある時点までそうした変化について無自覚だったことだ。これまた自伝の中で書かれていることだが、彼はKISSのトリビュート・バンドであるCOLD GIN(ギタリストは言うまでもなくトミー・セイヤー)が彼らの初期楽曲を演奏するのを聴いた際に「自分達はそもそもヘア・メタル(=80年代的メタル)ではなく、クラシック・ロック・バンドとして始まった。メタルよりもHUMBLE PIEやTHE WHOに近いスタイルだった」と思い返すことになったのだという。比較的ノーマルなキーで歌うポールと、突き抜けるようなハイトーンを武器とするポール。どちらが良いとか正しいということではないが、ひとつ確かなのは、彼の歌声自体が長いキャリアの中で進化と発展を続けてきたということだろう。そして、それを支えてきたのは、他ならぬ彼自身の本気度の高さなのである。

1999年、彼はミュージカル「オペラ座の怪人(THE PHANTOM OF THE OPERA)」の主演を務めている。物語の主人公であるファントムは、顔の醜い部分を隠すために仮面をつけた作曲家。彼はオーディションを受けてこの役を勝ち取り、それに対応するために必要な訓練まで受けてこの難役を演じきっている。そのステージを観覧したジーンは「あんな歌い方をどこで習得したんだ?」と驚いていたという。ポールはこの経験を振り返りながら「ファントムの仮面をつけたことで自分自身をさらけ出せるようになった」と発言している。彼がこの役に人一倍の思い入れを抱いたのは、かつて小耳症に悩まされ、髪の毛を伸ばして右耳を隠していた若き日の自分自身をファントムに重ねながら感情移入していたからだった。そして念のため補足しておくと、ポールはのちに手術を受け、安定した右耳の聴覚を手に入れている。

ポールは、ロバート・プラントとテリー・リード、あるいはロッド・スチュワートとフランキー・ミラーの違い——つまり誰もがスーパースターと認める存在と、同じように素晴らしい才能を持っていながらそうなり得なかった人物とを分けたものは何かという問いに対して、「才能以外のすべて。努力と本気度」だと答えている。これは、彼自身が常に自身の向上のために本気の努力を惜しまずにきたからこそ吐ける言葉だろう。

確かに今、SOUL STATIONでのポールは、いくぶん力を抜き、持てる力のすべてを使い切らずに歌っているように映るかもしれない。しかしそれはあくまで表面的なスタイルの差異によるイメージの違いでしかなく、ここでも彼は当然のように本気なのだ。遠い昔、マスクをつけた正義の味方に憧れた少年は、いつしか本当にスターチャイルドの名に相応しい存在となった。しかも、こうして成熟を重ね、自らのルーツに忠実な歌を素顔で披露するようになった現在の彼も、やはり人間味に溢れたスーパーヒーローなのである。■■■

▲2018年1月10日、SOUL STATIONとしての初来日時のポール。本誌の取材に応え、「何度も訪れてきた大好きな国に、心底愛しているもうひとつのバンドを連れてこられてとても嬉しい」と素直に喜びを語っていた。

PAUL STANLEY'S SOUL STATION in Japan 2018
pix Masahiro Nakao